

朝は眠い

統計課

企画分析グループ

森田 教司



いつもは控目にしているくせに、朝になると自分の仕事だとばかりに、不愉快な金属音で怒鳴りちらす目覚し時計で、今日も目を覚した。

その時、外は仄暗く、寒くて、雨どいから水が滴る音なんかしていて、おまけに月曜日でもあったものなら、いっそのまま永い深い眠りに入ってしまった方がいいやという気持ちになる。

天井を見つめながら、ほんの数秒間だけいつも考える。

「再びこの瞼を閉じたところで、世の中になんの影響もないに違いない。」

でも、今となっては、この思いを実行に移す勇氣はない。

リズムで動く朝の仕度を済まして家を出る。駅までの道のりを太陽に向かって歩く。朝、太陽に向うということは、当然帰りも駅を出ると家まで太陽に向かって歩いて行くのである。

幼ない頃、私は太陽は自分だけについてくるものと思っていた。まったく自分勝手なものである。正確に言うならば、ついてくるように見えるのは何故だろうと思っていたのかも知れない。

太陽を見ながら歩くと、ついてくるのである。

電車に乗っていても、周りの景色は目まぐるしく移り変わってゆくのに、太陽はついてくるのである。純粹だった。

太陽が出てから、駅までの道のりを歩くのはまだよい。真冬の太陽がまだ出ない時間の駅までの道のりで、すごい経験をしたことがある。

歯を磨いて、顔を洗って慌しく家を出た。すご

く寒くて7、8分の道のりをただ黙々と歩いた。駅について、何気なしに髪に手をやると、前髪が凍っていた。顔を洗って急いで出てきたので、前髪が多少濡れたままだったのである。ここは、シベリアか。そしたら、これからシベリア鉄道に乗るのか。

また、この駅までの道のりは、交通の激しい通りを2本渡らなければならない。例えば、それが木曜日や、金曜日だったりするとおよそこの町には、似つかわしくない練馬や足立の3ナンバーの車が列をなしてやってくる。道を渡れない私はいらつく。ただでさえ時間がないのに電車に乗り遅れてしまう。岩間インターを降りてゴルフ場に向っているのである。この私はこれから仕事に行くというのに。

「駅から家は近いの。」とよく聞かれる。普通は、「歩いて7、8分。」って答えている。ただ、気分によって、「だいたい500歩。」という時もあった。

幼ない頃(小学校の低学年)、私は学校の帰り道、家まで何歩あるか数えたことがある。

ただ、約15分かかったということは覚えているが、実際に何歩だったかは忘れてしまった。

そんな子供だった。

家から駅までは実際に数えたことはないが、そのようなことを思い出して、いい加減な答えをしていたのだろう。

また明日も、余計なことを考えながらこの道を歩く。

経 済 動 向

国 内 の 動 き

●生産の一服感強まる

経済企画庁が11月28日発表した9月の景気動向指数によると、景気の先行きを示す先行指数は36.4%、一致指数は20.0%、遅行指数は28.6%で、86年12月以来33ヵ月ぶりに3指数そろって景気判断の分かれ目とされる50%を下回った。

企画庁では「生産関係の統計の動きが一時的に弱かった

●輸入、93年度までに倍増

自動車、電機、機械などが国の輸出額上位50メーカーが通産省の要請を受け、中期的な輸入拡大・輸出抑制計画の策定を一齐に始めた。通産省は各社に対し①1993年度までに製品・部品の輸入額を88年度の2倍に増やす②それまでに輸出が増える場合は増加分と同じ額を輸入計画に上乘せする—という具体的な輸出入目標の達成を求めている。

●途上国向け債権、大幅下落

先進国の民間銀行が保有する途上国向け債権の流通価格が大幅に下落している。途上国の経済再建がもたつき債務返済が遅れているうえ、欧米の銀行が貸倒引当金を大量に積み増まして途上国債権の売却を進めているからだ。7月に額面の34%台だったブラジル向け債権の価格が17日現在

ため。10月は生産も回復しており、3指数とも50%を上回る」としている。景気動向指数は生産動向に敏感に反応するため、今年に入って月ごとに大きく変動している。

特に7～9月期の生産は一服感が強かったため、9月は3指数そろって50%を下回った。

(日経 11月29日付)

上位50社の輸出額合計は日本の輸出総額の6割を占めており、大がかりな準管理貿易の体制下に置かれる。各社が計画を実現すれば貿易黒字は縮小に向う公算が大きいのが、強引なミクロ調整をすれば企業の国際競争力を低下させるとの懸念の声も広がっている。

(日経 11月20日付)

で22%まで下がったほか、アルゼンチン向けの価格も過去最低に近い水準をつけている。この問題への特効薬はなく、当面債権の大幅な反発は難かしいと見る向きが多い。

(日経 11月21日付)

県 内 の 動 き

●ニュービジネス協会発足

21世紀に向けての成長産業と期待されるニュービジネスの育成振興に向けて、茨城県が組織化を目指していた「いばらきニュービジネス21協会」の設立総会が11月7日、水戸市内で開催された。茨城県では筑波研究学園都市を中心に大工場、研究所の立地が相次いでいるが、茨城県内の企

業全体からみれば下請業務を中心とした中小企業が大半。急激な産業構造の変化に対応した新事業の展開、経営の多角化が課題となっている。今回発足した「ニュービジネス21協会」は、こうした中小企業の構造転換を側面から支援しようとするものだ。(日経 11月8日付)

●常陸那珂開発、3事業がスタート

常陸那珂開発における土地区画整理、工業団地の造成、公共下水道の3事業が11月9日スタートした。常陸那珂開発は旧水戸射爆場跡地の約1,100ヘクタールの土地に大規模流通港湾、国営海浜公園、石炭火力発電所を設けるとい

うビッグプロジェクトで、今回、これに続く3事業に着手したことで、開発事業のすべてが出そろったことになる。

同日勝田市内で行われた3事業合同起工式には関係者多数が参加、着工を祝った。(日経 11月10日付)